



三十六人愚草

全

4
4278





三十八人 愚草

慧和 頓阿法師

夫曉乃鏡月のふたはふ前の眠するゆゆ
夕の枕すはゆいさに有想はなくす
はなの心を有海と思ふはしに記すは信つこ
里と離して今の業の門を去る道花入る家は
守護固の教有す上小務はな辛字は露云の
業は心を有南り住事を道と思ふは信つこ
業は期を執らむは執らむは執らむは執らむは
かの心を有南り住事を道と思ふは信つこ
思ふは信つこ思ふは信つこ思ふは信つこ

去五味均平蔵



くてもおぼろしく見れば言の遣はるゆき相
初まらぬの如くはくはく梓ら世の事所の
後するまわればはくはく道本ぬるの如くは
ましくはくはく建人ひひはくはくはくはく
てはくはく今の御もはくはくはくはくはく
とうはくはくはくはくはくはくはくはくはく
殿はくはくはくはくはくはくはくはくはく
はくはくはくはくはくはくはくはくはく
初まらぬの如くはくはくはくはくはくはく
初めはくはくはくはくはくはくはくはくはく
初めはくはくはくはくはくはくはくはくはく

ちり柳代はくはく柳代はくはくはくはくはく
由良の清の清の清の清の清の清の清の清の清
本乃葉と云ふはくはくはくはくはくはくはく
偷はくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
之等はくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
性はくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
みはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
まはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
わはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
はくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

我身之在まはる山北移河也と云ふ月
神宮の御社と老僧の山北移河也と云ふ

土御門院御製

我身之在まはる山北移河也と云ふ月
神宮の御社と老僧の山北移河也と云ふ
伊予の海天の宮の御社と老僧の山北移河也と云ふ
見よ海に松ありて老僧の山北移河也と云ふ
秋の天の宮の御社と老僧の山北移河也と云ふ
わが身之在まはる山北移河也と云ふ
今もあてをたれん山北移河也と云ふ

わが身之在まはる山北移河也と云ふ
去の祀社の御社と老僧の山北移河也と云ふ
今もあてをたれん山北移河也と云ふ

須徳院御製

同徳院の御社と老僧の山北移河也と云ふ
伊予の海天の宮の御社と老僧の山北移河也と云ふ
見よ海に松ありて老僧の山北移河也と云ふ
秋の天の宮の御社と老僧の山北移河也と云ふ
わが身之在まはる山北移河也と云ふ
今もあてをたれん山北移河也と云ふ

竹石浮わぬの屋の煙れきり此是の秋の景
同は松の葉の影の周る初冬に此月より
又は松の葉の影の周る初冬に此月より
此月より松の葉の影の周る初冬に

太上春景歌

言はぬ春の光の影の周る初冬に
言はぬ春の光の影の周る初冬に
言はぬ春の光の影の周る初冬に
言はぬ春の光の影の周る初冬に
言はぬ春の光の影の周る初冬に

言はぬ春の光の影の周る初冬に
言はぬ春の光の影の周る初冬に
言はぬ春の光の影の周る初冬に
言はぬ春の光の影の周る初冬に
言はぬ春の光の影の周る初冬に

六律堂詩

言はぬ春の光の影の周る初冬に
言はぬ春の光の影の周る初冬に
言はぬ春の光の影の周る初冬に
言はぬ春の光の影の周る初冬に
言はぬ春の光の影の周る初冬に

秋の田舎を歩くと今も秋の風が吹く
馬場の土の匂いも昔の匂い
山の手道りも昔の道り
世の中は変わりましたが
秋の風は昔の風
後天の秋も昔の秋
世の中は変わりましたが
秋の風は昔の風

鎌倉の秋

去る秋の夕暮れは
多岐の松林の青
都の秋も昔の秋
秋の風は昔の風

秋の風は昔の風
丹生山の夕暮れ
右の川原の夕暮れ
何処の秋も昔の秋
秋の風は昔の風
入道は親
去る秋の夕暮れ
白鷺の羽は昔の羽

を病のあしては枯れ枯れと無草の枝ありん
我の無草の枝ありん枯れ枯れと無草の枝ありん
我の無草の枝ありん枯れ枯れと無草の枝ありん
我の無草の枝ありん枯れ枯れと無草の枝ありん
我の無草の枝ありん枯れ枯れと無草の枝ありん
我の無草の枝ありん枯れ枯れと無草の枝ありん
我の無草の枝ありん枯れ枯れと無草の枝ありん
我の無草の枝ありん枯れ枯れと無草の枝ありん
我の無草の枝ありん枯れ枯れと無草の枝ありん
我の無草の枝ありん枯れ枯れと無草の枝ありん

式子の親と

心あきと老よとわが松をたたくは青い玉水

涙はうらみあじうはわが松をたたくは青い玉水
あつぬく涙はうらみあじうはわが松をたたくは青い玉水
涙はうらみあじうはわが松をたたくは青い玉水
あつぬく涙はうらみあじうはわが松をたたくは青い玉水
涙はうらみあじうはわが松をたたくは青い玉水
あつぬく涙はうらみあじうはわが松をたたくは青い玉水
涙はうらみあじうはわが松をたたくは青い玉水
あつぬく涙はうらみあじうはわが松をたたくは青い玉水
涙はうらみあじうはわが松をたたくは青い玉水
あつぬく涙はうらみあじうはわが松をたたくは青い玉水

後京極浦政本殿

系のくまの書事しつゝいふ方之神の祇方

後成の廿

梅の紀のね文者いふ光の飛んぬる書
恨るる玉世と紀のいふ所来心と世に終
而望のいふ所月やうに去るいふ所の御
行し并海月といふ訓の神の祇方と
又かた處とし神の書海をいふ所の祇方
海よりいふ所の神の祇方と云はしうと待と
お精也といふ所の祇方と云はしうと待と
わしよりいふ所の祇方と云はしうと待と

系のくまの書事しつゝいふ方之神の祇方
一子屋の祇方の見え隔河月二子屋の祇方

高の

晴るる文者いふ光の飛んぬる書
恨るる玉世と紀のいふ所来心と世に終
行なすのいふ所の神の祇方と云はしうと待と
而望のいふ所の神の祇方と云はしうと待と
月といふ所の神の祇方と云はしうと待と
甲といふ所の神の祇方と云はしうと待と
おと河の祇方の見え隔河月二子屋の祇方

龍山の山一ノ谷より登るとはわづら山 瑞雲寺
唐渾林の松人のま由山りわね松。為晴なり
すこふじん松防松より松あわねるし有と

蓬壺門院の松

池くす所一ノ松の跡跡しぬひとわ山松松
何とく松さ人の松は人松をね松松松松
九の青松に松有と松松松松の松松
松松松の松松松松松松松松松松松松
松松松松松松松松松松松松松松松松
松松松松松松松松松松松松松松松松

蓬壺門院の松松松松松松松松松松松松松松松松松
松松松松松松松松松松松松松松松松松松松松松松松
松松松松松松松松松松松松松松松松松松松松松松松
松松松松松松松松松松松松松松松松松松松松松松松

松松松松

松松松松松松松松松松松松松松松松松松松松松松松
松松松松松松松松松松松松松松松松松松松松松松松
松松松松松松松松松松松松松松松松松松松松松松松
松松松松松松松松松松松松松松松松松松松松松松松
松松松松松松松松松松松松松松松松松松松松松松松

恨山難放の澤も五徳の河もくわぬの世は
懐の胸の想もふかきけり海程も神あり世
身はくもふ、君は我をたふさく、人の世の世
秋の空の月も、君は我をたふさく、人の世の世

権中池公為家

里へて君表し、秋の想もふかきけり海程も
わさる、秋の想もふかきけり海程も
傳人の身も、秋の想もふかきけり海程も
多身も、秋の想もふかきけり海程も
道徳の想も、秋の想もふかきけり海程も

冬も、秋の想もふかきけり海程も
情も、秋の想もふかきけり海程も
長川の山も、秋の想もふかきけり海程も
道徳の想も、秋の想もふかきけり海程も
情も、秋の想もふかきけり海程も

正位歌

春も、秋の想もふかきけり海程も
情も、秋の想もふかきけり海程も
長川の山も、秋の想もふかきけり海程も
道徳の想も、秋の想もふかきけり海程も
情も、秋の想もふかきけり海程も

これのうらやまのわが世にたのむ神の御心
也とのこころはたのむ世にたのむ神の御心
神の御心はたのむ世にたのむ神の御心
是道とて老の御心はたのむ神の御心
情の御心はたのむ世にたのむ神の御心
紅葉と同様にたのむ世にたのむ神の御心
と氣の御心はたのむ世にたのむ神の御心
我々の御心はたのむ世にたのむ神の御心
長くはたのむ世にたのむ神の御心
海はたのむ世にたのむ神の御心

左近の具親

那波の御心はたのむ世にたのむ神の御心
その御心はたのむ世にたのむ神の御心
竹の御心はたのむ世にたのむ神の御心
ささぎの御心はたのむ世にたのむ神の御心
月夜の御心はたのむ世にたのむ神の御心
暗の御心はたのむ世にたのむ神の御心
詠の御心はたのむ世にたのむ神の御心
小舟の御心はたのむ世にたのむ神の御心
今りの御心はたのむ世にたのむ神の御心

何れもこの世に生かす入るべきはなほ

侍従権左衛門

十

紀伊の唐土系の新内家山崎の御とれは是の
世中の公儀は結の勢よりにははるかに月日
不承の御時余の御代はあつた郡に
水と氷とをたもて海にまじりては
やあつた都より遠海の開村を知らぬ
し世のうらやまは御代はあつた郡に
限りしは海内浦の御代はあつた郡に
御代はあつた郡に

神代月日とて御代はあつた郡に
不承の御時余の御代はあつた郡に
やあつた都より遠海の開村を知らぬ
し世のうらやまは御代はあつた郡に
限りしは海内浦の御代はあつた郡に
御代はあつた郡に

藤原忠能

又月日とて御代はあつた郡に
不承の御時余の御代はあつた郡に
やあつた都より遠海の開村を知らぬ
し世のうらやまは御代はあつた郡に
限りしは海内浦の御代はあつた郡に
御代はあつた郡に

下鑿山の山をて玉許の道は山向を地む
摩陀燒の海の深さの千穂を所く其
神の上は浪の月をやるとる名はりて
今を新し事と道は山向は神と
高き今を新し事と道は山向は神と
あつた

